

スポーツ社会学における一考察

梅 村 清 弘

目 次

はじめに	1
体育と集団	3
第1節 スポーツ集団の構造と機能	6
第2節 集団とモラル	13
第3節 リーダーシップ (指導)	23
第4節 スポーツクラブにおける 監督者のあり方	28
第5節 スポーツ集団のもつ問題点	37
参考文献	43

は じ め に

人間とは、一定の思考様式と行動様式、つまり一定の文化を所有するところの社会的人間である。体育の対象となっている人間も、当然のことながらこの社会的人間なのである。

しかるに、これまでの体育は、人間の身体的成長発達をその主要な目的としてきた。もちろん、体育において身体的価値を軽視することはできないし、体育によって養われる身体的効果は十分に価値をもつものであるこ

とは万人の認むるところであろう。

また、身体を精神的に形成することを体育の本質と見做す考え方もあり、精神を身体よりも優位にたたせているのであるが、現実の人間の把握としては抽象的にならざるを得ない。

今日の体育は、身体と精神の成長発達のいずれか一方に偏したものであってはならない。体育を通しての人間形成をその使命とする以上、すなわち抽象化された個々人を対象としているのではなく、大きさ・構造・機能の違うさまざまな集団に所属する成員として、所属集団の理想・目標・生活様式に適応しながら生活している社会成員＝社会的人間が体育の対象となっているのであるからして、我々は、もはや、体育を個人的側面においてのみ追求する態度をすて、その社会的側面において研究していかなくてはならないのである。

こうした点から、「体育の事実や問題を、社会学的な角度から研究し、その合理性を高めようとする学問」もしくは、「体育の事実や問題を、社会学の態度（経験的かつ実証的）、理論、方法をもって研究し、その成果を体育の進歩や問題の解決に役立てようとする学問」であるところの「体育社会学」が、今日ようやく脚光を浴びるようになってきたのである。

さて、体育を教育という観点から考察するとき、体育社会学は、教育社会学の一領域あるいは一分科として考えられるのが適当であろう。

しかし、今日、体育社会学とスポーツ社会学との関係がひとつの問題となっておる。体育とスポーツとは同一の概念ではない。したがって、体育の社会学とスポーツの社会学とは区別されなければならないというのである。しかし、この考えも、かならずしも正しいとは肯定できない。一般的に、スポーツは、体育という概念をも含みうるということからきているのではなかろうか。われわれは両者の密接な関連や内容の重複について考察すると共に、両者の関係は、その研究において、体育の社会学的研究が、その必要上スポーツの社会学的研究に進む場合と、スポーツの社会学的研究が体育に関係づけられる場合との二つの方向で考えられる。しかし具体

的にどう区別するかは、相当困難である。体育学会には、体育社会学の部門があり、スポーツ社会学的研究もそのなかに含めて考えられている。

外国では、わが国とは反対に、スポーツ社会学という名称が一般的であり、体育社会学的研究を、その中に含めて考える傾向にある。この両者の区別・関係については今後、充分検討の必要があり、なお今後の研究問題である。

ともあれ本稿は、体育指導は、経験や直観によってのみ行なわれることは許されない。一部分のスポーツのみを愛好する者にのみ体育の指導をまかすわけにはいかない。すでに体育は人間形成の上の教育手段としての価値を認められている以上、科学的資料の基礎づけの上に築かれた一般的原理をもった指導者を必要としているのである。体育の指導者が、ルールや方法のみを指導するようでは、職人の域を脱していないといえよう。体育指導者は、体育という社会的事実の実践を通しつつ、つねに科学的資料および事実の発見につとめるべきであろうとの見地から論をすすめてゆくことにする。

体 育 と 集 団

体育には個人的側面と社会的側面とがあるが、本稿においては体育社会学という立場から、その社会的側面について考察していくことにする。要するに、体育は、⁽²⁾健康を維持増進し、身体や運動能力の発達を促すだけでなく民主的な社会態度の育成をはかり、生活を豊かにするため運動を生活のなかに活用することができるようになることを目標としている。体育において、身体的目標と同時に、民主的な社会態度の育成という社会的目標が強調されるのは、体育における集団的活動の場が、民主的社会における望ましい人間関係の育成の場であり、その可能性をもった場であることが認識されてきたからにほかならない。

学校体育は、とくに社会性の育成という面を強調してきているし、今日

のスポーツを中心とした体育もまたしかりである。

こうして、社会的側面とその教育という点に強調点をおくかぎり、教育社会学の領域というものについて述べた蔵内数太教授の考えは、体育社会学にとっても極めて示唆多きものがあるといえよう。少々長くなるが蔵内教授の説明を引用することにする。

「すべての実践は単に理想を描くだけでなく、その実現の可能性を吟味した上でなされるべきものであることは言うまでもない。目的設定に当ってはその目的設定の可能性を、また可能性を見るためには事実を考察しなければならない。この事実の客観的な把握は経験科学の任務であり、教育に関して社会学が寄与できるのはこの事実の把握においてである。教育社会学は教育の実践に寄与をなすことができるが、その学問的性格は社会学の理念に従って、あくまで客観的・経験的態度をとることに存する。

教育事象の社会学的研究は教育に寄与すると共に、また社会にデータを供することができる。この二つの事柄のいずれかを目標にすることによって、それを教育学の分野に属すするとも言え、社会学の分野に属するとも言える。

教育社会学は方法的立場において社会学であり、その問題の分野はこれを社会学のそれに従って規定できる。社会学は人間の社会的関係と社会的集合体を研究の対象とするが、またこのような関係や集合体の角度より事物を考察することもできる。

教育は一方において人間関係における事象であり、また様々の集合体を生み出しているが、他方においてはそれは一定の理想や理念に基づき、一定の技術によって行なわれているものであり、またそこにおいて社会の文化的遺産が伝達されているものである。教育社会学は従って教育の集団社会学的研究と文化社会学的研究とを包括しなければならない。」と述べている。

体育を社会集団という見地から研究することの重要性は、以上の考え方からも明らかどころである。

社会集団といっても、その構造・機能という点から種々多様の型式が存在しているが、とにかく、それを構成している成員間に相互作用があり、その関係の上に成員の意識や行動の様式が型相化され、組織されているところに成立するものが社会集団であるということができよう。

このような社会集団を体育との関連においてとりあげてゆくことの重要性はしばしば述べてきた。例えば、いかに技術的にすぐれた者が集まっていたとしても、それだけでチームとして良い成果をあげることは不可能であり、そこにチーム・ワークというものが必要となってくるであろう。このチーム・ワークとはチーム、即ち集団内の個々の成員の結びつきから生じてくるものであることはいうまでもあるまい。ここに集団内の人間関係というものが体育の面においてもとりあげられなくてはならない課題となってくるのである。

体育社会学の対象となる集団は何等かの形で体育と関係のある集団であるが、便宜上、さらにこれらを、①特に体育的な目的でつくられ、あるいは体育と関係の深い集団と、②その機能の一部として体育的機能を持ち、あるいは、体育に影響をもつ集団とに区別することが一つの行き方である。もち論多くの集団をこの二つのいずれかにふり分けることはかなり困難であるから、この区別は便宜的なものと言わなければならない。またたとえ、このような分類に従うにしても、その考察においては、基礎的集団と機能的集団の区別に従って見ることができる。

便宜上、さきの分類に従って見るならば、各種の運動クラブやスポーツ団体、スポーツの観衆、運動部の後援団体等は基礎的集団に入れて考えてよいだろうし、集団としての特性、成立や特有な人間関係、社会過程（団結や崩壊）、行動様式、パーソナリティ形成との関係などが考察の対象となるのである。

これに対し、都市や農村、民族・家族や遊戯集団、職場集団や学校（内集団を含めて）、国家、新聞ラジオ等の各種の企業体等の各種の集団は、それぞれの形において体育的機能を持ち、あるいはその機能が体育に影響を

もっている。

本稿においては、社会集団を体育（スポーツ）と関連させて追求してゆくことにする。体育（スポーツ）と集団を論ずる場合、なんといってもわれわれは、まず、規模の小さい社会集団、即ち小集団をとりあげなくてはならない。何故なら、体育（スポーツ）集団、とくにスポーツ集団の単位をみてみると、国家・都市・農村といったような類型に比し、極めて小規模な集団だからである。

人間が生まれてすぐに経験する集団は家族である。次いで、近所隣りとの関係、つまり近隣集団、そして遊び友達との関係、つまり遊戯集団、そして学級集団へと経験が重なり、やがていろいろの機能をそれぞれもっている集団、例えば職場集団などへ参加していくのである。

こうしたものは、一応、すべて小集団ということができよう。そしてその中には、社会学的に常に問題にされてきているところの一次的集団が存在しているのである。

ここで、まず、小集団、とくに一次的集団とはいかなるものかについてふれておくことにする。それは体育（スポーツ）の集団社会学的研究にとって欠くことのできない基礎知識だからである。

第1節 スポーツ集団の構造と機能

本節では、花田・竹村・藤善共著「スポーツマン的性格」の中から、高校と大学の運動部を調査対象としたスポーツ集団の構造と機能についての調査研究を紹介することにする。この研究は、スポーツクラブにおけるリーダーシップ、モラルの問題考察について、示唆多きものがある。

竹村氏は、²²⁾ 集団の構造的な分析考察において、規範の生成過程を重要視し、規範生成過程から構造を明らかにしようとした。この構造を規範生成構造と呼ぶことにし、この構造と集団の機能とを比較し、研究しようとしている。

- ① スポーツ集団の構造を規範生成過程から分析し、集団の類型化を試みる。
- ② スポーツ集団の機能を集団目標成就の機能、集団成員結合の機能、目標成就と成員結合の重複した機能の3機能から分析する。
- ③ スポーツ集団の構造と機能の関連を検討する。

これに用いた調査は、スポーツ集団の規範生成構造の調査と集団的機能の調査である。そしてスポーツ集団の規範生成構造の調査については、集団の目標および規範生成過程を分析する基準を設けた。(第1表参照)

また、集団的機能の調査については、①集団の目標成就の機能、②成員の結合の機能、③目標成就と成員結合の重複した機能、の3機能を分析する基準を設けた。(第2表参照)

第1表 運動部の目標および規範の生成過程から構造を分析する基準・項目・観点

基準	規 範			目 標		
	練習計画	キャプテンの選出	部則や部の約束こと	目標の内容	目標の作られ方	個人の受けとめ方
項目	㊦ 部員の意志の反映の有無 ㊧ 方法の内容 ㊨ 決定権の所在（最終決定者）			㊦ 統一的 ㊧ 個別的	㊦ 部員の意志の反映の有無 ㊧ 方法の内容 ㊨ 決定権の所在	肯 定 否 定 意識しない 無 関 心
観望	㊦ 反映する・反映しない・わからない ㊧ 誰によって・どのような方法で ㊨ 全員・キャプテン・マネージャー・監督・コーチ・上級生・その他どこにあるか			◎まとまった目標 ◎個人別の目標	㊦ 反映する・反映しない・わからない ㊧ 誰によって どのような方法で ㊨ 全員・キャプテン・監督・コーチ・上級生・伝統・その他どこにあるか	1. 正しい 2. しかたがない 3. まちがっている 4. 意識せず 5. 無記入

第2表 運動部の機能を分析する基準・項目・観点

基準	部 員 結 合 の 機 能						雰 囲 気 ・ 高圧的 ・ 温情的 ・ 親和的
項目	地 位 に よ る 関 係 (下級生が上級生に対する)			役 割 に よ る 関 係 (キャプテンと部員との関係)			
	服 従	親 和	尊 敬	服 従	親 和	尊 敬	
観点	5(絶対服従)	5(非常に親しい)	5(非常に尊敬している)	5(絶対)	5(非常に)	5(非常に)	試合に負けたとき
	4(よくさく)	4(わりあい親しい)	4(わりあい尊敬している)	4(よくさく)	4(わりあい)	4(わりあい)	・ 怒る人は誰か
	3(普通)	3(普通)	3(普通)	3(普通)	3(普通)	3(普通)	・ 慰める人は誰か
	2(あまりさかない)	2(あまり親しくない)	2(あまり尊敬していない)	2(あまり)	2(あまり)	2(あまり)	・ 励ます人は誰か
	1(全然さかない)	1(全然親しくない)	1(全然尊敬していない)	1(全然)	1(全然)	1(全然)	
基準	目標機能 部員の結合と部の目標成就の重複した機能						
項目	戦績からみた強さ	A 個人の練習への参加の程度(%)	B 部員全体の練習への参加の程度(%)	個人(A)と全体(B)の参加の判断の一致度	規則などの遵守の程度		チームワークの程度
観点	A	非常に高い (90%以上の参加)		非常に高い	5 非常によく守られている	5 非常によい	
	B	高 い (80%以上の参加)		高 い	4 よく守られている	4 少しよい	
	B	普 通 (70%以上の参加)		普 通	3 普 通	3 普 通	
	C	低 い (60%以下の参加)		低 い	2 あまり守られていない	2 やや悪い	
	D	非常に低い (59%以下の参加)		非常に低い	1 全然守られていない	1 非常に悪い	

注 1.) 雰囲気に関して

高圧的とは部外者や上級生などの怒りが部員や下級生に一方的に流れるような雰囲気
温情的とは慰めや励ましなどが上から下に一方的に流れるような雰囲気
親和的とは怒りや慰め、励ましなどの感情が上下の別なく水平的に流れあうような雰囲気

2.) 強さの判定基準

A…大学選手権で優勝可能と思われる程度——高校選手権で優勝可能と思われる程度
B…運動部の学生連盟で二部に属している程度——県で優勝可能と思われる程度
C…運動部の学生連盟で二部又は三部に属している程度——県で普通レベルと思われる程度
D…運動部の学生連盟で四部以下に属している程度——県で普通以下と思われる程度

1) スポーツ集団の構造

集団の目標や規範の内容と、それらがつくられていく過程における決定権（実質的な決定者）の所在によって規範生成構造を分析し、それによって集団構造の類型化を試みた。ところで、集団の規範生成構造を考える場合、集団の規範として何をとりあげるかが重要な問題である。ここではもっとも重要なものとして練習計画を、つぎに成員の中で指導性をもっとも発揮すべき役割をもたされているキャプテンを問題としてキャプテンの選出法を、3番目に日常の集団生活の規範として出てくる集団内の規則や約束ごとをとりあげた。

規範生成構造を分析して大きく3つないし4つの特徴にわけることができる。すなわち

- ① 運動部の目標やきまりが部員以外の監督やコーチなどによって決定される運動部、これを部員外型とした。
- ② 運動部の目標やきまりがキャプテン・マネージャー・上級生などで決められたり、それらの人びとと監督・コーチなどとの話し合いで決定される運動部、これを主脳型とした。
- ③ 運動部の目標やきまりなどが、部員相互の話し合いによって決定される運動部、これを部員型とした。（第3表参照）

第3表 運動部の類型化

運動部の規範生成過程における実質的支配力の所在	類 型
部 員	部 員 型
部員内主脳者（キャプテン・マネージャ・上級生など）	部員内主脳型 } 主脳型
部員内主脳者と部員外者	
部員外者（伝統・部長・監督・コーチなど）	部 員 外 型

2) スポーツ集団の機能

ここでは、課題機能と集団機能に対応して、集団の目標成就の機能と成員結合の機能を考察し、さらに、この両者の重複した機能を加えて3つの機能からスポーツ集団の機能を検討しておく。

以下、目標成就の機能（試合の戦績からみた運動部の強さ）と関係する主要な条件と考えられる運動部の練習への参加の程度と、部のきまりなど遵守の程度について考察してみよう。

目標成就の機能と練習への参加率、および練習参加率における個人と部全体の判断の一致度との関係を統計的に検定した結果、運動部の強さの程度と練習への参加率との間に有意な差が認められた。すなわち、試合で運動部ほど練習への参加率が高く、かつ、個人と部全体の活動に対する判断の一致度も高い。また、集団内での規則などの遵守も強い運動部ほど高いという傾向がうかがわれる。

つまり、試合で強い運動部ほど部員の練習への参加がよく、しかも各部員とも部員全体の活動に対して正確な判断をもっており、運動部で定められた規則や約束ごとなどがよく守られているということになる。

3) スポーツ集団の構造と機能の関連

集団の規範生成構造から分けられたスポーツ集団について、その集団的機能を分析し、それぞれの集団の機能的特徴を比較してみると、第4表のようになる。

まず、目標成就の機能についてみると、ほとんど全部の運動部が「試合に勝つこと」「強くなること」を目標としているところから、目標成就の機能を試合での戦績による強さから判断すると、部員外型運動部に非常に強い運動部が多く、部員型は反対に運動部としてはあまり強くない傾向がみられ、主脳型は両者の中間の強さの運動部が多かった。

つぎに、成員結合の機能については、上級生と下級生の関係（地位による関係）とキャプテンと部員の関係（役割関係）をそれぞれ服従・親和・尊敬の程度とその理由について調べ、また、試合に負けた時に示される人

間関係から集団の雰囲気のみようとした。

その結果、部員外型運動部では、一般に下級生は上級生の権力に対して服従するような結合がみられ、命令—服従的關係を示して、部の雰囲気は高圧的である。

主脳型運動部では、下級生は上級生を比較的尊敬しており、上級生の權威を認めて従うという尊敬—服従的關係を示し、部の雰囲気は温情的である。

部員型運動部では、下級生と上級生の間に、親しさによる結合関係がみられ、合意—親和的關係を示し、部の雰囲気は非常に親和的であるのが特徴である。

また、キャプテンと部員の関係では、どの構造型でもキャプテンの言うことに従っているが、その理由をみると、キャプテンが部員以外の者や主脳者の指名または推薦という形で選ばれることの多い部員外型運動部や主脳型運動部では、部員はキャプテンがこわいから、実力があるからとか、習慣的に服従しているというに、どちらかという権力型の人間関係を示

第4表 運動部の規範生成構造型における集団的機能の特徴

基準 項目 構造型	目標成就 の機能	部員結合の機能		目標成就と部員結合の重複した機能			
	戦績から判 断した強さ	部員間の結 合の性質	雰囲気	練習への 参加度	参加に対 する判断 の一致度	規則の遵守 度	チーム・ ワーク
部員外型	非常に強い	下級生は上級 生に対して、 権力による服 従的結合	高圧的 (温情的)	非常に 高い	非常に 高い	非常によく守 られているか または、よく 守られている	普通かま たは、少 しよい
主脳型	強い	下級生は上級 生に対して、 權威による尊 敬的結合	温情的 (高圧的)	かなり 高い	あまり 高くない	よく守られて いるか、普通	かなりよ いかま たは、普通
部員型	普通かま たは弱い	下級生は上級 生に対して、 合意による親 和的結合	親和的 (温情的)	かなり 高い	あまり 高くない	よく守られて いる	非常によ いかま たは、よい

しているのに対し、部員型運動部では、自分たちで選んだキャプテンだから従うのが当然だとして、全般的に民主的な人間関係がみられる。

これらのことから、部員外型と主脳型の人間関係は、一般に強制の原理による権力的構造を示しているのに対して、部員型の運動部では協同の原理による民主的構造を示しているのが特徴であると考えられる。

最後に、目標成就と成員結合の重複した機能についてみると、まず、チーム・ワークは部員外型運動部から主脳型運動部、部員型運動部となるにしたがって一般によくなる傾向がみられるが、チーム・ワークのよさは試合時と部生活とでは必ずしも一致していない。

運動部の規則などの遵守度は、部員外型運動部では非常によく守られ、主脳型運動部、部員型運動部ではよく守られているか、または普通程度である。しかし、秩序維持の原理は、部員外型と主脳型は専制的であり、部員型は協同的であることが特徴としてあげられる。また、練習への参加率は、部員外型がもっとも多く練習に参加しており、主脳型、部員型としいに低くなる傾向がある。

このような結果によってわかるように、各構造型の運動部はそれぞれの構造に対応して機能が異なっているといえることができる。

以上、スポーツ集団の構造と機能を、とくに運動部の規範生成構造と3つの集团的機能から検討をすすめてきたが、それらを要約すると次のとおりである。

- ① 運動部の目標と規範生成過程における実質的な決定者の所在から、運動部の目標やきまりなどが監督やコーチなどの部員外者によって決定される部員外型運動部、キャプテン、マネージャー、上級生で決められたり、それらの人たちと監督、コーチなどとの話し合いで決定される主脳型運動部（部主脳型と部員内主脳型にわかれる）、部員相互の話し合いによって決定される部員型運動部の構造型にわけられた。
- ② 各構造型における集团的機能の検討からは、まず目標成就の機能では、運動部が強くなりたという目標がほとんどであったので、試合

成績の強さを基準にして比較すると、部員外型運動部がもっとも強く、以下主脳型運動部、部員型運動部の順になる。また、成員結合の機能では、その特徴的な結合関係は、部員外型運動部では下級生は上級生に対して権力にもとづく服従的結合、主脳型運動部では権威にもとづく尊敬的結合、部員型運動部では合意にもとづく親和的結合を示す。そして、一般的には、部員外型と主脳型は強制の原理による権力的構造を示し、部員型は協同の原理による民主的構造を示すのが特徴といえる。さらに、目標成就と成員結合の重複した機能では、運動部の練習への参加と部の規則などの遵守は部員外型運動部がもっともよく、主脳型運動部、部員型運動部の順に低下していく傾向がみられるのである。

以上の調査研究からみて分かるように、スポーツ集団の構造と機能は、職場集団のそれらとは相異し、実績そのものの評価（戦績）が、集団の構造と機能の上に大きく影響を与えている。これはスポーツ集団のもつ大きな特性のひとつと言ってもよいであろう。

第2節 集団とモラル

スポーツ集団を研究するばあい、われわれにとって重要な問題のひとつは、集団のモラル（*morale*）である。

モラルという言葉—フランス語に語源を有し⁽²³⁾、英語ではこれを *morale* と書き、これは「道徳的」という意味の *morale* とは多少異なった言葉である—は、本来「軍隊の士気」という意味に使用されてきたが、⁽²⁴⁾ 集団の結集度、凝集性（あるいは団結力 *group cohesiveness*）、あるいは集団意識（*group consciousness*）、集団精神（*Gruppengeist*）自発的な協同意欲（*Willingness to cooperate*）などの高揚の程度を表現する用語であって、これを集団を構成している成員個人の側からみると、成員個々人の集団への結合の程度、あるいは積極性の程度、集団への帰属意識の度合、一体感などとも規定できる。

したがって、三枝氏は⁽²⁵⁾、「モラルとは産業界にのみ存在するのではな

く、およそ人間が集合して一定の集団を形づくり、なんらかの集団的活動を営んでいる限り、いかなるとき、いかなるところにも発見される現象なのである」といっておる。

また、青沼吉松教授は⁽²⁶⁾、モラルとは、組織目的を達成するために同質的かつ持続的に結合する集団の能力を、動機の面から見たものであると規定しておる。

R・リピットは、モラルとは「集団内における自発的凝集である」としている。ここでいう凝集とは、集団の成員が一致協力して共通の目標に向かい、「われわれ感情」を成員が共有していることを意味している。また、自発的とは、この凝集が、指導者によって導入されるよりは、「われわれ自身のもの」とであると各成員が感じとるところの態度によって引きおこされることを意味している。

アメリカの産業社会学者や産業心理学者は、一般的に「ある集団ないし組織の成員が、成員であることに誇りと満足とをもって結合し、集団ないし組織の共通目的の達成に向かって積極的に努力しようとする態度ないし感情」がモラルであると考えているようである。

以上のようないろいろの見解を通じていえることは、モラルとは孤立した個人の問題ではなく、集団内における人間関係に関する概念であり、モラルをぬきにして人間関係を論ずることは不可能であるといえよう。

A・H・レクトンは、モラルについて次の5要素をあげている⁽²⁷⁾。

- (1) 集団の個々の成員の集団目的に対する信頼感。
- (2) 集団の各成員のすべての階層の指導者に対する信頼。
- (3) 組織（インフォーマルなものとフォーマルなものの両者を含む）の能率性。
- (4) 集団の各成員の、その集団の他の成員に対する信頼感。
- (5) 集団成員個々人の精神的・肉体的健康。

以上のような5つの要素が織りなされてモラルは存在し、機能するのである。この各要素は、その集団がおかれた状況に応じてたえずそれぞれ

の比重が変化しつつけているのである。

レイトンの示したモラルの 5 要素の 1 つに精神的・肉体的健康というものが挙げられているが、これは体育の目標でもある。したがって、集団のモラルは、体育訓練によって獲得できるところの「健康」に影響されるといえるであろう。逆に、体育を通して集団のモラルも高められるともいえるであろう。

ここでモラルといっても、高いモラルと低いモラル、いいかえるならば、高いモラルをもった集団と、低いモラルをもった集団とが存在することが推察できよう。

D. クレッチは高いモラルの徴候として次のようなものを挙げている⁽²⁸⁾。

- (イ) 単に外部的な圧力の結果ではなく、内部的な凝集によって結合しようとする集団の傾向。
- (ロ) 集団内部にあつれきや分裂がほとんど存在しない。
- (ハ) 内部に争いがあっても集団自身の手で処理し、必要な内部的再適応のできるように、変化する状況に集団を適応させること。
- (ニ) 集団成員の結合感が強い。
- (ホ) 集団成員が、目標について共同意識をもっていること。
- (ヘ) 集団の目的や指導に関して成員が積極的態度をもつこと。
- (ト) 集団成員が、集団を維持してゆくことを願い、かつ、そのことに積極的価値を認めること。

これに反し、低いモラルとは、

- (イ) 外部的な力によって集団が結合されている。
- (ロ) 集団成員間に親しい情緒的交流がなく、相互に敵対や拒否の感情がある。
- (ハ) 情勢の変化に適応できず、あつれきが生じ分裂する状態にある。

以上のような集団に、低いモラルが見られるといえよう。

モラルに関する研究はアメリカにおいて盛んに行なわれている分野である。ホーソン工場実験などに代表される産業社会学の分野において、産

業内の縦の関係によるフォーマルな組織よりも、ある組織内で日頃顔をつきあわせて作業している人々の横のつながり、インフォーマルな人間関係（小集団である）が、生産性に強い影響を及ぼすことが明らかにされている。このことは、インフォーマルな小集団の人間関係がモラルを左右していることを立証したものである。最近、わが国においても、ヒューマン・リレーションズという言葉が一般化してきたが、各産業企業体および学界において、この研究が活発化している。

産業社会学的研究のほかに、アメリカでは第二次大戦中の軍隊のモラルについての研究が著名である。S・A・ストウファーの「アメリカ兵士—第二次大戦中の社会心理学的研究」およびこれを研究したE・シリズの「アメリカ軍隊内の一次的集団—“アメリカ兵士”の範囲と方法に関する研究」があった。ストウファーやシリズの結論は、第二次大戦中のアメリカ兵士のモラルを高めていたものは、愛国心とか敵軍に対する憎悪感ではなく、彼等が所属している中隊への忠誠心と、中隊内の一次的関係によるものであるということであった⁽²⁹⁾。

また、E・A・シルズとM・ジャノヴィッツの「第二次大戦中のドイツ軍における凝集と不統合」の研究は、戦時中に行なわれた諜報部と心理戦争部の宣伝戦のための資料に基づいたものである⁽³⁰⁾。

ドイツ軍の異常なまでの頑強さは、ドイツ兵の強烈な国家社会主義的信念とヒットラーへの同一視に帰着されていたが、それは間接的、部分的なものであり、一次的集団（彼等が直接的に所属する戦闘集団）が円滑に機能する状態が許され、一次的集団が高度の凝集力を発達させている場合には、ドイツ兵の連帯感とモラルは、兵隊達の政治的態度とは無関係に高かったことが発見された。ここでも一次的集団とモラルの関連は促らえられているのである。

R・リピッドの研究では、権威主義的集団の子供達は、社会的地位を争い、モラルと自治が失われたのにたいし、民主主義的集団の子供達は、意欲的で、高いモラルを示していた。

もう一つの研究事例について述べてみる。これは、J・G・ジェンキンスが、第二次大戦中の2つの海軍飛行中隊について行なったものである⁽³¹⁾。

2つの飛行中隊は、1人の指揮官と1人の執行官、17人の隊員から構成されている。

この17名に対して、「中隊内あるいは中隊外のもので、誰といっしょに飛行したいか、また誰といっしょに飛びたくないか」を問い、無記名で答えさせたものである。その結果をソシオグラムに示したのが次ページの2つの図表である。

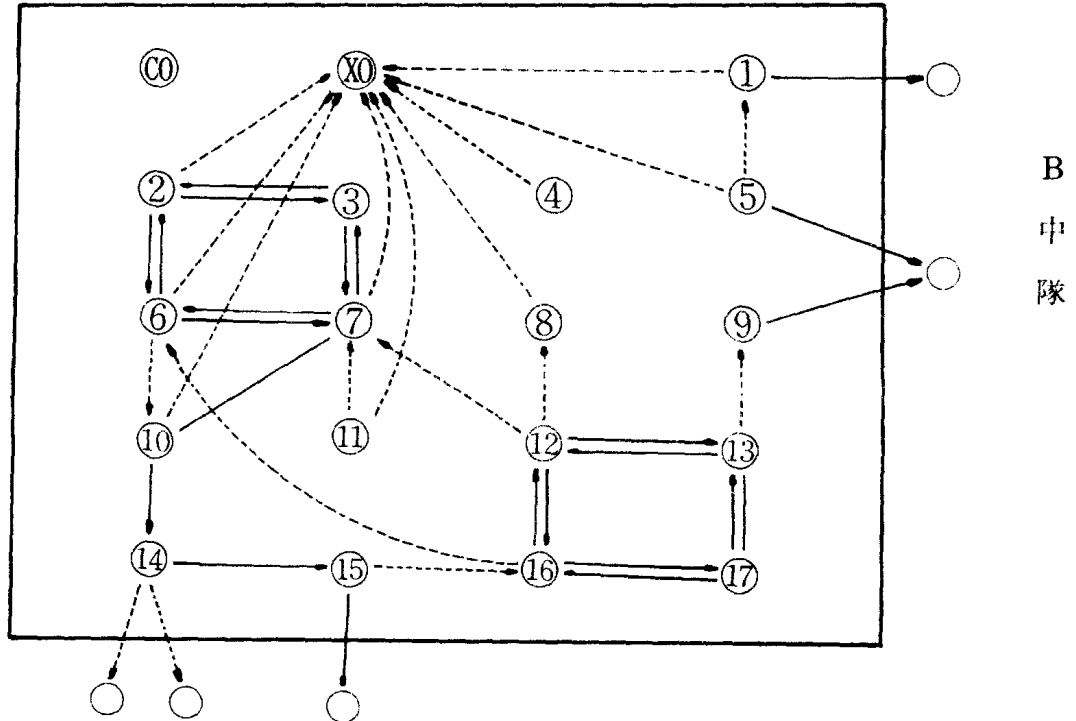
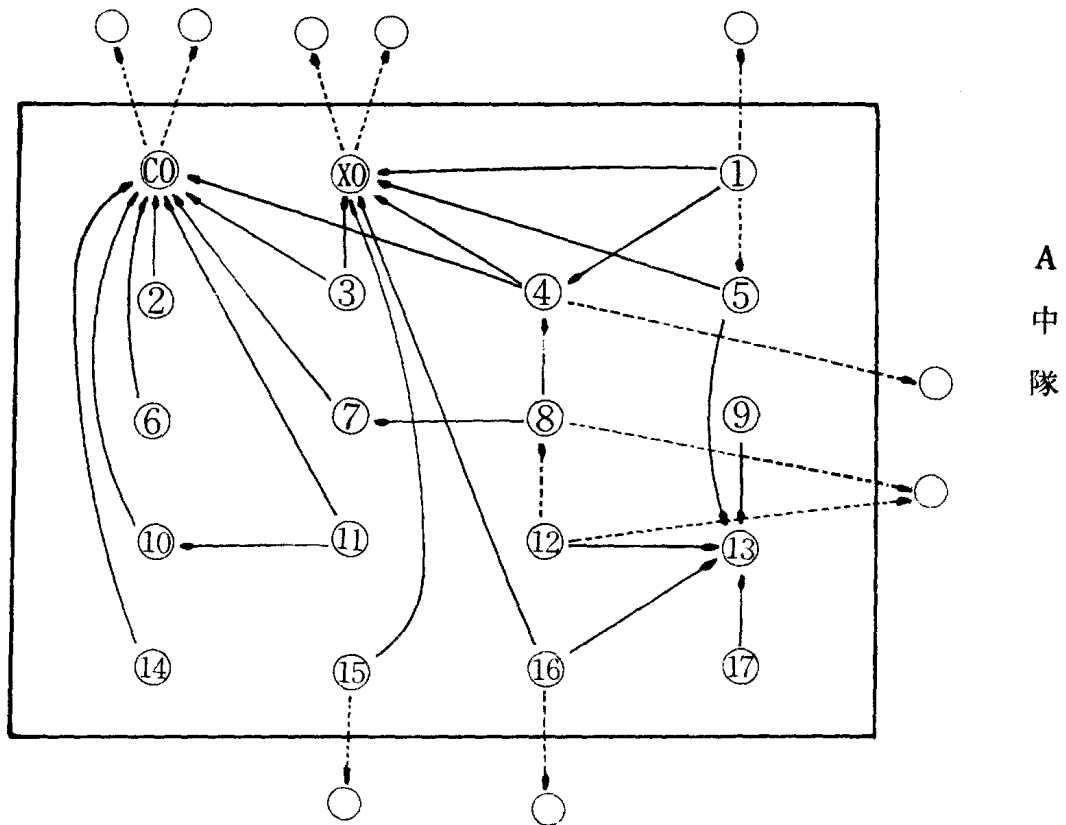
図によってみると、A中隊では、指揮官は8人の隊員から、執行官は6人の隊員から好意をもって指名されている。ところが、B中隊では、指揮官は否定的にも隊員の誰からも指名されていないし、執行官は誰からも好意をもたれていないのみならず、9人から拒否されている。

この二つの集団のリーダーに対する差異からいっても、A中隊のモラルがB中隊のそれよりもすぐれていることは容易に認められるであろう。

第二の差異は、B中隊には二つの下位集団（2,3,6,7）（12,13,16,17）が存在している。これらの下位集団は相互に選択していて、強固な結合をし、その小さい集団以外の隊員は選択しない閉鎖的な性格をもっている。それに反し、A中隊には、この種のはっきりした下位集団は存在しない。全体は指揮官あるいは執行官を中心として結合し、わずかに⑬は5人の隊員から指名されて一部のリーダーとなっているにすぎない。

第三の差異は、集団のモラルをみる上に興味ある点であるが、中隊外の人に対する関係のいかんである。A中隊には、中隊には、中隊外のものを選択するものは1人もいなく、10人は中隊外のことを拒否しているが、B中隊では逆に4人は中隊外に仲間を求め、わずかに2人だけが中隊外のことを拒否している。

以上はアメリカの飛行中隊についての事例研究であるが、指揮官を、監督・部長・コーチ等におきかえ、執行官を主将に、隊員を部員におきかえ、ひとつの運動部の構造を知るために使用できる。こうして得られた結果と



CO = 指揮官

XO = 執行官

——→ 給 合

- - - -> 拒 否

その運動部のチームワークやモラルを関連させて考察していくことは、運動部の教育的効果と成績とをあげるためにも重要な手がかりとなることは明らかである。

しかし、どのようにしたらモラルが高められるかという問題が生じてくる。これについて述べておこう。

幼児は成長するにしたがい、自からの努力において、よりむずかしい目標と、よりむずかしい方法とを選択しようとすることはよくいわれている。

このことは幼児のみならず、われわれもまた、個人の能力の限界まで要求水準を高めようとするであろう。スポーツ界によくいわれている「記録の壁」などがそのひとつの表現である。しかし、いたずらに要求水準を高めようとするわけではなく、むしろ失敗から自己を守ろうとして、水準を下げる傾向にもあるといえよう。この目標をいかに高く設定するか、そしていかにして現実の水準と接触せしめるかは、個人にとっても集団にとっても重要であろう。

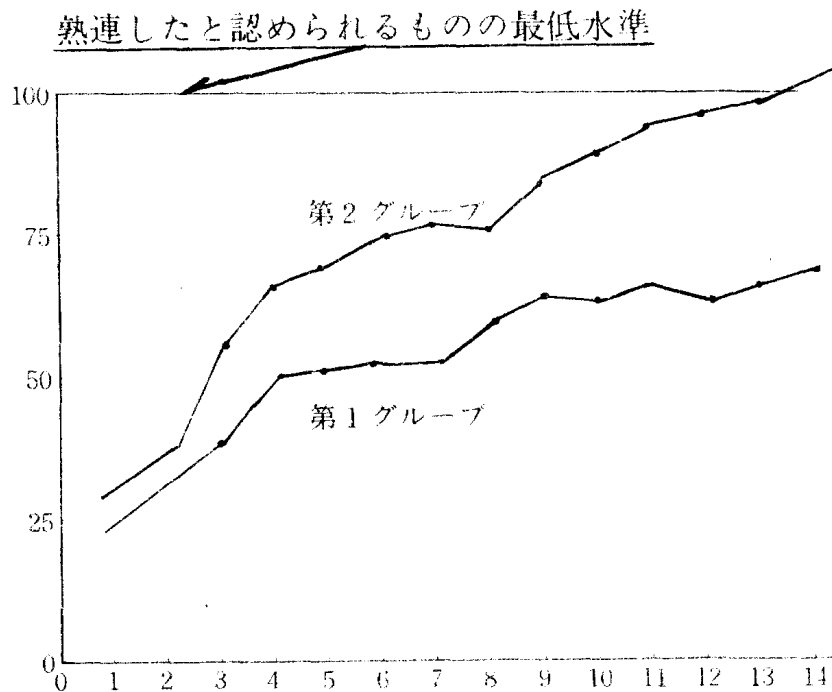
スポーツ界において、各種競技、とくに陸上競技において、オリンピックへの参加選手を選ぶ際に、標準記録をつくって、それに達した、またはそれを破った者を選ぶということをしている。この標準記録を、もし世界最高記録をもってあてるとなれば、現状では到達できる者はほとんどなく、いたずらに希望を放棄させる結果を招くであろう。そこで、妥当と思われる記録（一応、達成の希望がもて、しかもある程度は高い水準にある）を設定している。もちろん、これらの記録設定は、すべて個人的種目に関するものであり、それがただちに集団のモラルに結びつくものではないにしても、各校・各団体の陸上チームを刺激するという点において、集団的效果をもつということもできよう。

高い目標を維持しつつ、可能な範囲内においてその目標達成のための現実的行動を計画し努力することは、高いモラルを発展させるために基本的に必要とされるものである。

これに関する実験例を、体育集団についてではないが紹介しておこう⁽³²⁾。

この実験は、A・J・マーロウが、ミシン工場において、要求水準と目標との現実度とが、工員の作業量にどのような影響を与えるかについて考察したものである。

工員は二つの集団にわかれ、それぞれ40人を単位として行なわれている。まずこれらの工員は、見習工として、作業について一週間の訓練を受けるが、最初これら見習工の生産高は熟練した工員の規準として認められている量の25%から28%であった（下図参照）



そこで、第二週以後、二つの集団に対する目標の与え方を変えたのである。まず第一集団の見習工員達に対しては、いつも10ないし12週間後の後に到達しなければならない最終目標だけが告げられる。ところが、最初の一週間の後には、彼らがなしとげた水準と与えられた規準との差はあまりに大きいので、被験者たちはそこに達することについて懷疑をいだくのであった。その後作業はつづけられたにもかかわらず、進歩は遅々として進まず、14週間後にわずかに規準の66%に達したにすぎなかった。

ところが、同じ水準から出発した第二の集団は、一般的規準を示すことのほかに、その週の終りまでに到達すべき一定の目標を示した。この近い将来に対する近い目標と、集団の最終目標の認識との組み合わせは、より速やかな改善を促がした。

集団の生産高は、14週間後には予定された規準以上に達したのであった。

さて、スポーツ集団のモラルについて、多和氏は次のように述べている⁽³³⁾。

チームゲームの試合の結果を左右するものは、チームの技術的な力に相違はないが、さらに集団精神がプラスされて総合的に威力を発揮するものである。したがって、コーチは自分のチームの実力を存分に発揮させようと思うならば、集団精神を涵養する方策について具体的な知識を策について具体的な知識集団精神は、チーム・スピリットとか、あるいはパートナー意識などと言われるものであって、いずれも、集団の結合度、凝結意識などの高い低いの度合をあらわす言葉である。

それは、ちょうどわれわれが自国に抱いている愛国心や、あるいは母校・家庭などに対して抱いている感情と同種類のもので、自分が集団の重要な一員であると考えており、しかも集団の力や偉大さに永久的な誇りを持つ状態を、高度に涵養された集団精神と考えてさしつかえないのである。

しからば集団精神はチームに対して、どのような効果を及ぼすのであろうか。

(1) 集団精神は、個人のチームに対する犠牲的精神を発揚する。

すなわち、チームと一体化した個人は、チームに誇りと愛情を感じチームの利益のために、個人の福利を犠牲にしてもよいという感じをもたせる。

(2) 集団精神は練習意欲を刺激し、より偉大な成果を達成させる精神的なエネルギーとして働く。

すなわち、チームの中の各メンバーは、他の成員がチームの目標のために真剣に努力している姿をまのあたりに見ることによって刺激され、さらに、自分も他の成員から期待されていると感じることによって、チームと

同僚のためにより一層努力するようになる。

(3) 集团的競争心を助長する。

すなわち、チームの集団精神が高ければ高いほど、自己の所属するチームに誇をもち、他の同列のチームに負けまいとすることに敏感となり、その結果は、ますますチームを結束させ、より強くなろうとする練習意欲を高める。

では、コーチとして、このような集団精神を涵養する方法は、何であろうか。以下その原則的なものについて示してみよう。

a. チームの目標を明確にする。

チームの目標は、顕著で単一な目標であり、親近感の持てるもので、しかも達成可能なものでなければならない。目標が余りにも現実離れして高度で、その達成に疑いがもたれる場合には情熱が失なわれる。これに反して、目標が容易すぎるときも、情熱は湧いてこない。成功と失敗との公算が相半ばするような場合に、チームとしての努力と情熱が高揚するのである。

b. 自分がチームと同一体であるという気持ちを持たせる。

それには、まず個人がそのチームの一員となったことを心から喜べるように、チームの伝統・歴史・功績を称揚し意識させる。

つぎに、自己がチームの中で重要存在となりうることを意識するようになる明確な役割を与える。補欠は補欠なりにチームを支える役割を持つことを理解させる。

c. よい伝統を築くこと。

伝統は、そのチームの歴史や過去の業績に対する誇を継承する間につくり上げられた習慣や生活態度である。コーチは、チームのメンバーに過去の伝統を受け継がせるとともに、明日の伝統のために自分たちの業績をつくらねばならぬ点を理解させなければならない。

d. ある一事について他チームに優越させる。

集団精神を高度に維持するためには、そのチームに何らかの優れた内容

がなければならない。しかし、すべてについて優越することは不可能であるから、何かひとつでも他のチームと伯仲することが出来るようなことがあれば、それをとらえて、集团的競争心を刺激する。

以上、われわれは、モラルという概念とその研究例とを中心にして考察してきた。

体育部の指導、学級の指導において、成員がその集団の目標を理解し、成員がその集団の目標を自己のものとしているか否か、つまり、集団目標と個人目標との間に一致があるか否かが、モラルを高めるか否かを決定する重要な点である。

集団目標が、指導者によって一方的に与えられ、成員がその目標の樹立にも、計画の設定にも参与しないならば、成員はそれに責任を感じず、したがって、日常の活動はその日その日をただ過すにすぎず、積極的活動が失われることになるであろう。これは、前に述べた R・リピットの権威主義的リーダーのもとにある成員の、反集团的行動が立証しているところである。

この点に留意しつつ体育指導は行なわれなくてはならないのである。ただし、自由放任主義的リーダーが効果をあげえなかったという、リピットの発見もまた、同時にあわせて考慮されるべきである。民主的体育指導とは、いたずらに集団成員に集団活動をまかせるのではなく、あくまで、指導する者としての自覚の上に、成員の自主性を奨励しつつ、科学的指導を行なうべきなのである。

第3節 リーダーシップ(指導)

馬場明男教授は、「いかに民主主義が発達しても、人間が共同生活を営むにあたり何者かによって指導されぬ状況は考えられぬであろう。大衆といえども自己決定、自己組織、もしくは自己方向づけをすることは不可能である。まして、ある関心を充足するために一定の組織をもって活動しようとする社会団体にはリーダーは不可欠のものである。

リーダーシップは個人的現象でもあり、高度に機能的性質を帯びた社会現象でもある。指導者は、あらゆる社会条件の下にあらゆる社会生活の中に生ずるし、又必要なものである。リーダーシップの活動は一定の社会状況から生ずる諸因子の結合作用の結果である。この状況が指導者を招き、確保し、つくる。指導者は集団にとって総ての社会行動にふくまれた成員、もしくは参加者のエネルギーと才能に進路を与え、統合する因子である⁽³⁴⁾と述べている。

指導者の問題を取りあげた学者にM・シェラーとM・ウェーバーがいる。シェラーは、指導者をもって模範的人物とし、その典型として聖者・天才・英雄をあげていた。ウェーバーは、リーダーシップの型を、伝統的なもの、官僚的なもの、カリスマ的なものの3種類に分類していた。伝統的なリーダーシップは、伝統的な意味や価値によって組織された社会に生じ、官僚的リーダーシップは社会構成の公的形式がある程度統合された集団にとってかわっている社会に生じ、カリスマ的リーダーシップは大衆社会に存在するというのである。

また、ラルフ・M・ストンデイルは⁽³⁵⁾、リーダーシップは組織体のひとつの局面であるとの考察から「リーダーシップとは、目標を設定し、その目標に達成しようと努力する。組織された活動に影響を及ぼす過程（行為）である」と定義できるとし、また「リーダーシップは組織された集団と、その目標に直接関係づけて定義できる」としている。リーダーシップの存在を可能にする最小限度の社会的条件として、次のことがあげられる。

1. 集団（2人、あるいはそれ以上の人からなる）
2. 共通の仕事（あるいは目標に指向された活動）
3. 責任の分化（成員の一部が相異なる義務を負っている）

今日、リーダーシップは小集団との関連において論ずる傾向が強く、しかも実験的研究にもとづいているのである。リーダーシップは個人と集団成員との社会的相互作用の一形式であるから、リーダーシップには必ずフォローシップが問題となるであろう。こうした点を考慮に入れるとリーダ

ーシップの研究には3つの側面があるといえる。

そのひとつは、指導者の側面にたつ研究である。これはリーダーシップ研究の中心点ともなるべきものであろう。指導様式が重視されているが、前にふれた R・リピットの「権威主義的」・「民主主義的」・「自由放任主義的」の3つの概念は、多方面に広く用いられているものである。一般に民主主義的指導の効果が認められているが、被指導者の社会的性格や集団構造と相対関係にあるということが最近指摘されるようになった。また、一般的にはフォーマルな機構の整った集団においては指導者の機能的性格が問題となるのに対し、インフォーマルな集団においては指導者の人格的な性格が問題となるとされている。つまり、縦の関係における公式的な指導者は、技術的側面が重視され、横の関係における自然発生的指導者はその人間的側面が重視されるのである。もちろん、現実の体育指導—学級指導やクラブ指導をふくめて—においては、両者のいずれかに割りきることはできず、その両者が要求されるであろう。

その二は、被指導者の側面にたつ研究である。ここで研究の中心となっているものは、被指導者が集団の中におかれることによって発生し指導者によって充足されることを望んでいる欲求の性質である。人間関係の方針に立脚した産業社会学者やフロイド主義に立脚した研究はこの側面を重視している。

その三は、集団の側面にたつ研究である。

一つの集団が、独立性をもった集団であるのか、それともある組織の下位集団であるのかを分析しようとするのである。また、フォーマルな組織とインフォーマルな組織も問題とし、フォーマルな組織とインフォーマルな組織も問題とし、フォーマルな組織においてリーダーシップを機能させるに当り、成員が忠誠心をいだいている自然発生的規範を考慮しなくてはならないとしている。つまり、指導者は成員が暗黙のうちに認めあっている規範に一致しないかぎり、指導は不可能であるとするのである。この点は、体育指導者も重視しなくてはならない。たとえば、あるスポーツ・ク

ラブには、先輩から後輩へと長年にわたって伝えられてきた伝統のうちになんらかの規範性をもったものがあることが多い。

そして、たえず先輩団との相互交渉がある。こうした場合、指導者は、それを必ずしも絶対視したり、タブー視したりする必要はないが、軽視できぬであろう。これらをどう扱い、またこれらを合理化し、教育的使命と一致させなくてはならないという点に、指導者は注意をむけなくてはならないのである。

指導者は指導する。そしてこの現象は時間と空間を問わず普遍的な現象である。それでは指導するとはいかなることであろうか。

J・コッフィン¹⁾は指導者の機能として計画・組織・説得の3つを挙げている。すなわち、

計画とは、集団の行なうべき活動の立案であり、計画である。そして集団の目的を設定する機能である。

組織とは、目的を実現するためにさまざまなメンバーの活動を組織化する機能である。

説得とは、組織化された通路によってメンバーを説得・誘導する機能である。

浅井浅一・大西誠一郎の両氏は、

- (1) リーダーは集団の調整者である。つまり、成員の個人的要求を調整する機能を果しているのである。
- (2) リーダーは集団のシンボルである。成員はリーダーを信頼し、服従し、同一化しているのである。
- (3) リーダーは外部に対する集団の代表者である。
- (4) したがって、リーダーは成員に対して賞罰を与える執行者である。

以上のような機能をもって、自然発生的な、インフォーマルな指導者と、公式的・形式的に固定されたフォーマルな指導者との両者に通じて課せられたものであり、これらの機能を果すことによって、リーダーはリーダーたりうるとしている。

ところで体育指導者、とくにスポーツ・クラブ指導者としての教師は二重の意味をもっているといえよう。つまり、一つのスポーツ・クラブに所属するメンバー全体を指導する役割と、そのクラブに発生するインフォーマルな内集団とそのリーダーを指導していく役割とがある。最近の傾向として、教師のリーダーシップは民主的であることを必要とされている。そしてクラブの運営はクラブ員の自主性にゆだねることが最善の道とされている。しかし、学校という大きな単位に所属する小集団としての性格上、同時に教育という性格上、放任することは許されない。指導しつつ自主性を発達させてやらなくてはならない。単に技術上の指導をするのが教師の任務ではない。体育活動を通じて人間形成を目指しているのである。

こうした意味で、これまでに事例をあげながら強調してきたところであるが、一つの集団内に自然的に発生する下位集団構造を、全体構造とともに把握し、さらに下位集団に発生するリーダーと規範とを把握しなくてはならない。たとえば、クラブの主将を選ぶ場合、教師や学校側との連絡に都合の良い者を選ばせるよう指示したり、または選んだりすることは危険である。集団の成員からの信頼感を得ていないような者がリーダーになった場合に、モラルが下り、教育的効果も上らないことはすでに述べてきたところである。

しかも、何故、ある者が成員達から好感をもたれ、またある者が拒否されるかの原因をつきとめ、拒否された者が完全なる孤立者となることを防ぐのも、教師としての指導者の役割である。

このためには科学的追求が必要であり、たえず研究して資料を得ることが必要なのである。

くりかえしていおう。

体育指導者として教師は、技術のみにとらわれたりして職人になってはいけない。

技術・精神・健康などが一体となっている社会的人間の育成が理想である。そしてこの理想はあくまで追求されなくてはならないものである。

体育を通しての人間形成こそ体育指導者に与えられた使命である。これは抽象的観念ではない。実践的観念として効果あらしめるべきである。

第4節 スポーツ・クラブにおける監督者のあり方

1. はじめに

最近にいたってもなお、スポーツ・クラブにおける多数の監督者は、クラブ員に対して、過去に彼らがあじわった単なる経験や、また多くのばあい、彼らの全く主観的な意味においてだけ理想と考えられる信念に固執して、誤った指導方法をおこなっている。

このような現状においては、到底、クラブ自体の目的はもとより、クラブ員個人個人の目的にも満足を与えることはできず、つねになんらかの形でクラブ員の少数あるいは多数の者に不満を与える結果となっている。

そこで、このような不満を打破するために、よい監督者のあり方ということに焦点をむけて、人間関係的見地からその実態を把握し、いかなる指導によれば、より効果的な成果を収めることができるのかという主旨のもとに、クラブ員に対して調査を実施した。

2. 調査方法とその対象

調査は昨年（昭和56年）の10月中旬に実施した。

調査対象には、名古屋市の中京大学陸上競技クラブを選択し、クラブ員一般に選手であるか否かを問わず、一様に質問紙を用いる集団調査（被調査者を一堂に集めて調査の趣旨、記入要領などを説明の上、質問紙に記入してもらう方法）の方法によっておこなった。

しかし、ここで特筆すべきことは、わたくしが、一昨年まで4年の間、そのクラブに所属し、またそのクラブの選手であったことと、そのクラブの監督者からは7年の間つづけてコーチを受けたことである。

さて、調査の対象となったクラブ員は、一応毎日グラウンドに出て練習をしているということを前提とした。クラブ員は、通常、名前だけという者も合わせて100名前後であるが、本調査の対象となったクラブ員は、男子

ばかりの53名で、女子を除いた全体の70%弱である。

3. クラブ員から見た監督者の監督指導方法

スポーツ・クラブを研究する場合、われわれがもっとも注意しなければならないのは、そのクラブの監督者がどのような監督指導をとっているかということである。なぜならスポーツ・クラブは、その性格上、職場集団やその他の集団などと比較して、全く監督者個人の力に大きく左右されているからである。そのため、現在、その監督者がどのような監督指導方法をとっているかは、監督指導方法のあり方を求めるばあいに重要な問題である。

したがってつぎに、一般クラブ員からは、現在のクラブの監督者は一体どんな監督指導方法をとっているとみているだろうか。またその監督指導方法は、どの程度クラブ員に受けいれられているであろうか。あるいは、またその監督指導方法は、クラブ員の監督者に対する評価にどんな影響をおよぼしているであろうか。監督者の監督指導方法（一般クラブ員からみた）のタイプ別に論及していきたい。

まず監督者の監督指導方法が民主的であるか、専制的であるか、放任的であるかについていうと、クラブ員の55%の者が放任的であると答え、あとの45%の者が民主的であると答えており、専制的であると答えた者は、ひとりもなかった。

つぎに、これを「あなたは、現在の監督者の監督指導方法をどう思いますか」との間とクロスした。その結果は、第1表の通りであって、どちら

第1表 監督指導方法に対するクラブ員の意見

クラブ員から見た 監督者の監督指導方法	監督指導方法に対する クラブ員の意見	もっとしめ た方がよい	もっと自主 性を尊重し てもらいたい	現在のま までよい。	計	人 数
放任的であると思っているグループ		52%	24%	24%	100%	29
民主的であると思っているグループ		50%	42%	8%	100%	24

のグループをみても、「もっとしめた方がよい」という意見の傾向がはっきりと認められる。

しかし、ここで疑問に思うのは、放任的であると思っているグループに「もっと自主性を尊重してもらいたい」との意見（24%）があることと、また民立的であると思っているグループにも同じく「もっと自主性を尊重してもらいたい」との意見42%があることとである。これについては、まだわたくしの研究するところである。

さらに、つぎに先のクラブ員からみた監督指導方法に対する問いの解答と、「総合的にみてあなたの監督者についてどう思いますか」の問いに対する解答との関係をしらべてみると、第2表のように監督指導方法を放任的であると思っているグループも民主的であると思っているグループもほぼ同じような評価を示しておる。しかしその評価は、どちらのグループにおいてもあまり高いものではなく、「大体よいと思う」の解答がグループの半数をこえる多数を占めている。

第2表 監督者に対するクラブ員の評価と監督指導方法

クラブ員から見た 監督者の監督指導方法	監督者に対するクラブ員の 評価	大変よいと 思う	大体よいと 思う	あまりかんば しくないと思う	計	人数
放任的であると思っているグループ		24%	66%	10%	100%	29
民主的であると思っているグループ		25%	75%	0%	100%	24

以上これらの結果から、われわれは、つぎのように結論づけても誤りではなかろう。すなわち、この監督者のとっている監督指導方法は、はじめの単純集計の明らかに示すように「練習方法をはっきり決めて、自由な行動を許さない」という専制的なタイプのそれではなく、きわめて民主的な、どちらかといえばある程度放任的なタイプのそれである。またこのような監督指導方法は、クロス集計の集すようにこのクラブのクラブ員にはあまり適切ではなく、さらにまた、監督者に対するクラブ員の評価をも低めて

いる。

したがって、現在、このクラブにもっともマッチしていると考えられる監督指導方法は、もっとしめた、つまりある程度専制的なタイプのそれであるといつてよからう。

4. 監督者の力量（技術的な）と指導力、および統率力

前節において、わたくしは、監督者の監督指導方法について、若干考察をおこなってきたが、本節においては、スポーツ・クラブにおける監督者にとつてもっとも重要な能力であると考えられている力量、指導力、および統率力について、考察をすすめていきたい。

まず、力量についてみると、クラブ員の62%の者が「十分な力量をもっている」と答え、また25%の者が「どちらともいえない」と答え、残りの13%の者が「力量に欠けるところがある」と答えておる。この結果については、わたくしの予想するところであつたが、それにしても十分な力量ありと答えた者（62%）の少なかったことは意外であつた。この疑問については、つぎに述べる指導力のところで明らかとならう。さて、指導力についてみると、ここでは「あなたの監督者の技術的な助言はどうですか」の問いに対する解答によつて、すなわち助言が有効であるか否かによつて、指導力の有無を判定することにした。その結果は第3表の示す通りであつて、クラブ員の監督者に対する指導力の評価は低い。ひとえに、これは、監督者のクラブ員に対する指導力の欠陥によるものであらう。それについては、以上二つの結果を相関することによつて一層明確となる。

第3表「あなたの監督の技術的な助言はどうですか」の問いに対する解答

自分の進歩のために非常に有効だ	26%
あまり役立っていない	23%
どちらともいえない	51%

第4表 力量と技術的な助言（指導力）

監督者の力量に対するクラブ員の態度 助言の有効性に対するクラブ員の解答	自分の進歩のために非常に有効だ	あまり役立っていない	どちらともいえない	計	人数
十分な力量をもっていると認めているグループ	43%	9%	50%	100%	14
あまり役立っていないといっているグループ	0%	71%	23%	100%	13
どちらともいえないといっているグループ	30%	35%	35%	100%	26

すなわち、第4表の示すように「十分な力量をもっている」と答えているグループにおいてさえ、技術的助言の有効性に対する評価は低く、さらにまた力量に対して「どちらともいえない」と答えているグループにおいてさえ、それに対する評価は低くなっておる。したがって、これは、明らかに、監督者の指導がクラブ員にマッチしていないことを物語っているといえるであろう。さらにつぎに、この指導力（技術的助言の有効性）に対する解答と、「監督者は、クラブ員をうまくまとめてゆくことができるかどうか」の問いに対する解答との関係をしらべてみると、第5表（次ページ）のようになかなり有意の関連が認められる。すなわち監督者の助言が非常に有効だと答えているグループでは、約半数に近いクラブ員が十分な統率力ありと認め、助言があまり役立っていないと答えているグループでは、大部分のクラブ員が「あまりまとめられていない」といって、監督者の指導力には消極的な態度をとっており、さらに「どちらともいえない」と答えているグループでは、いずれも同じようなパーセントを示しておる。

したがって、この結果から、監督者の指導力（技術的助言の有効度）というのは、監督者の統率力に対して、極めて強い影響を与えているという

第5表 技術的な助言と統率力

助言の有効性に対する場合 統率力に対するクラブ員の解答	非常にまとめられている	あまりよくまとめられていない	どちらともいえない	計	人数
非常に有効だといっているグループ	43%	9%	50%	100%	14
あまり役立っていないといっているグループ	0%	71%	23%	100%	13
どちらともいえないといっているグループ	30%	35%	35%	100%	26

ことがいえるようである。

さいごに統率力についてみると、第6表の通りであって、このクラブにおける監督者は、あまり統率力をもっていないことが判明している。つぎに、これを「あなたの監督者の技術的な力量はどうですか」の問いに対する解答とクロスしてみると、第7表のように「力量に欠けるところがある」、「どちらともいえない」と答えている二つのグループでは、いずれもかなりの相関が認められるが、「十分な力量をもっている」と答えているグループでは、あまり相関が認められない。したがって、この結果によれば、監督者の力量と統率力とは、かならずしもいつも相関しているものではないということが推測され得る。

第6表 監督者の統率力に対するクラブ員の解答

非常によくまとまっている	28%
あまりよくまとめられていない	38%
どちらともいえない	34%

第7表 力量と統率力

監督者の統率力に 対するクラブ 員の解答 に対するクラブ員の態度	非常によくまと められている	あまりよくまと められていない	どちらとも いえない	計	人 数
十分な力量をもっている といっているグループ	39%	22%	39%	100%	31
力量に欠ける所があると いっているグループ	0%	71%	29%	100%	7
どちらともいえないとい っているグループ	20%	53%	27%	100%	15

以上、本節においては、監督者の力量、および統率力について言及してきたのであるが、今一つこれらの結果を総括して、つぎのように結論づけて見よう。すなわち、

- (1) このスポーツ・クラブにおける監督者（日本有数のコーチ）が、実際には十分な技術的力量をもっているにもかかわらず、それに対するクラブ員の評価が低いという矛盾は、多くのばあい、その監督者がクラブ員への指導にあたって、自己の高いレベルにおいて助言を与え、クラブ員のレベルにおいて助言を与えていないということを意味している。つまり、監督者の指導がクラブ員のレベルにマッチしていないのである。
- (2) このスポーツ・クラブにおける監督者の指導力に対するクラブ員の評価は、その統率力に対するクラブ員の評価とは、かなりの相関を示している。したがって、つぎのようにいうことは相当の危険をともなうと思うが、あえてここに記すことにしよう。すなわち、監督者の指導力と統率力とは、互に密接な関係にあり、指導力は統率力に、統率力は指導力にそれぞれ強い影響をおよぼし合っているのである。
- (3) これと反対に、統率力と力量とは、低い評価のところではかなり相関を示しているが、高い評価のところではあまり相関を示していない。

それゆえ、これからいいうことは、力量をもっている監督者、必ずしも指導力・統率力をもっている監督者であるとは限らないということである。

5. 監督者との意思疎通

スポーツ・クラブにおいても、職場集団におけると同様、監督者がよりよい監督を行なうためには、監督者とそのクラブ員との意思疎通をより適切なものにしていくとともに、それによって両者のあいだにある障害となっているものを排除していくことが肝要である。こうして、少しでも障害が排除されれば、それだけ監督者とクラブ員との距離間は縮められ、相互に理解を深めることとなり、そしてそれがクラブの目標達成活動と同時に、個人の目標達成活動により強力な協力的影響をおよぼす。その結果、両者の目標達成活動は、なんの障害もなく、また容易におこなわれることができるようになる。

まず「監督者との意思疎通はどうですか」の問いに対する解答についてみると、一番多いのが「何んとなく話しづらい」で、全クラブ員の60%を占めており、つぎに多いのが、必要なことは話せるが、私的な問題については話しづらい」で、残りのパーセント全部（40%）を占めている。そして「何でも話しあえる」と答えているクラブ員は一人もいない。つぎに、この意思疎通に対するクラブ員の解答と「監督者は、どの程度、めんどうをみてくれますか」の問いに対する解答との関係を見ると第8表の通りであって、「何んとなく話しづらい」と答えているグループにおいても、また「必要なことは話せるが、私的な問題については話しづらい」と答えているグループにおいても、監督者が公的な面だけでなく、私的なめんどうもみてくれる、といっているクラブ員はほんの少数にすぎない。そして大部分のクラブ員が「公的な面だけ」あるいは「あまりめんどうをみてくれない」といっている。

さらにつぎに、先の意思疎通に対する解答と、「総合的にみてあなたの監督者についてどう思いますか」の問いに対する解答との関係をしらべてみ

ると、第9表のようにかなりの相関を示しておる。しかし、監督者に対する評価そのものは決してよいものであるとはいえない。

第8表 意思疎通と「監督者は、どの程度、めんどろを見てくれますか」の問いに対する解答

監督者がどの程度めんどろを見てくれるかに対する 意思疎通に対するクラブ員の解答	公的な面だけ	公的な面だけでなく私的なめんどろも見えてくれる	あまりめんどろを見てくれない	計	人 数
何となく話しづらいと答えているグループ	41%	12%	47%	100%	32
必要なことは話せるが私的な問題については話しづらいと答えているグループ	67%	9%	24%	100%	21

第9表 意思疎通と監督者に対する評価

監督に対するクラブ員の評価 意思疎通に対するクラブ員の解答	大変よいと思う	大体よいと思う	あまりかんばしくないと思う	計	人 数
何となく話しづらいと答えているグループ	23%	58%	19%	100%	32
必要なことは話せるが私的な問題については話しづらいと答えているグループ	9%	86%	5%	100%	21

以上により、われわれは、このクラブにおける監督者はクラブ員と気軽に話しのできるようなタイプの人ではなく、またクラブ員との意思疎通はスムーズにおこなわれていないということができよう。なお、意思疎通に対するクラブ員の考えは、監督者の総合的評価に対して強く影響を与えている。

b. む す び

さいごに調査の結果にあらわれたいくつかの傾向、結論について要約す

ると

- a) 監督指導方法については、民主的な、放任的なそれはあまり受け入れられない傾向にあり、またその評価もあまりよくないこと。そしてもっとしめた、いわゆる専制的なタイプの監督指導方法をとること。
- b) クラブ員のレベルにマッチした指導をおこなうこと。
- c) 力量と指導力、指導力と統率力、および力量と統率力とは、互に密接な関係にあり、また相互に影響を与えていること。
- d) 監督者との意思疎通がスムーズにおこなわれているか否かは、監督者に対するクラブ員の評価に強く影響を与えること。

などが明らかにされた。しかし、この調査は、まだまだ予備調査の段階にすぎないことをここに記しておくこと⁽³⁶⁾にする。

第5節 スポーツ集団のもつ問題点

最近の体育の発展ぶりにはすばらしいものがあり、その種類も多く、運動競技の種目も極めて多い。ちなみに国際オリンピック大会の競技種目の主なものをあげてみる。

陸上競技、バスケットボール、体操、ボクシング、レスリング、フェンシング、射撃、水泳、馬術、近代五種競技（馬術、フェンシング、射撃、水泳、競争）、サッカー、ボート、自転車、ラグビー、ハンドボール、陸上ホッケー、ポロ、水球、重量挙げ、ヨット等のほかに冬季オリンピック種目がある。さらに第17回東京大会からバレーボールと柔道も加えられることになった。

この他、テニス、卓球、野球、アメリカン・フットボール、剣道等、わが国で盛んな競技種目が多くある。

これら、それぞれが学校・各種団体にクラブを有し、ますます隆盛の道を歩んでいるのである。これらの各種スポーツの単位集団、横の連絡集団、さらに大きな給合的な集団等、体育集団は枚挙にいとまがないくらいであ

る。ここでは、それを一つ一つとりあげるのではなく、体育社会学の対象としての集団は「一」という意味において二つに大別しておく⁽³⁷⁾。

(1) 体育的な目的でつくられ、あるいは体育と密接な関係にある集団。

各種の運動クラブやスポーツ団体、スポーツの観衆、運動部の後援団体等は、これに属し、集団としての特性、特有の人間関係、社会過程（結成や崩壊）、行動様式、パーソナリティ形成との関係、などが考察の対象となる。

(2) その機能の一部として体育的機能を持ち、あるいは体育に影響をもつ集団。都市や農村のような地域社会、民族、家族、遊戯集団、職場集団や学校（内集団を含めて）、国家、新聞、ラジオ等の各種の企業体、等の各種の社会団体はそれぞれの形において体育的機能をもつか、あるいはその機能が体育に影響をもっている。Y・M・C・AやY・W・C・Aのような宗教団体の中にもこの体育的機能をいく分なりともっているものがある。

これらの集団は、一様に論ずることはできないが、それぞれの機能を理解しておくことは、体育の目標設定、カリキュラムの構成、指導法の改善等に役立つだけでなく、各集団のもつ体育的機能や影響力を調整し、体育の方策を立て、制度を改善するために役立つ資料を提供するであろう。

体育集団の主流をなすものは、なんといっても一つの関心に向かって凝集した集団である。すなわち、各種の運動を好む者が、それぞれの好む運動に参加するところに成立する集団である。いわゆる、各種スポーツ・クラブのことであるが、本節においては、この意味における体育集団がもっている2,3の問題点について述べていく。

この体育集団における活動を通じての局面が、最も民主的な社会であるといわれているのは⁽³⁸⁾、個人的活動が自由であり、しかもグループ・ワークによる場合が多いからである。集団行動の適応性、社会的技術の訓練、社会性の育成という面において、体育集団は多くの機会を与えている。

体育集団への参加者は、その活動自体に直接の魅力を感じており、練習

した結果や効果に関心をもつ以前に、すでに参加することだけで自己の要求を満たしているのである。

子供は体育的諸活動に参加することにより（自然発生的な遊戯集団への参加をも含めて）、社会生活の技術を身につけていくのである。J・リーは⁽³⁹⁾、「成人の遊戯は、人生更新（renewal of life）のレクリエーションであり、子供の遊戯は人生獲得（gainins of life）のレクリエーションである」と述べている。

以上のように体育集団は、人間の集団への社会的態度を、直接的に身体活動を通し、しかも半ば無意識に与えるという特徴をもっている。しかし、体育集団、前に述べたような意味での、つまり、中・高校以上のスポーツ・クラブは、反面、いくつかの問題点を含んでいるのである。

すなわち、現在の学生スポーツには、3つの大きな問題点があるのいえる。

その一は、学生のスポーツは、学生の自活によって組織運営させるべきである。

しかし、ここに学生のうちで、リーダーとなる者の性格が問題となってくる。たとえば、リーダーがボスの存在となり、クラブの実権を握って独裁的になるおそれがある。このため、権威主義的リーダーのもとにおいては集団のモラルが低下するというR・リピットの発見のように、そのスポーツ・クラブのチームワークが破壊され、時には解散という事態を招くことである。また、上級生の下級生に対するいたずらなる叱責や、時には、体罰などが考えなしに行なわれることもある。たとえば、最近の相つぐ大学空手部の事件などその現われの一つであろう。これらに対しては、学校当局の指導者の助言が必要とされる。しかし、あくまで助言であって、干渉となって表現されるのはいましむべきであろう。

その二は、選手と一般学生の体育における調和、すなわち、競技スポーツとレクリエーション・スポーツとの調和である。

この点では多くの問題がある。中学校における体育クラブは、課外教育

活動としての色彩が濃いのが当然であるのに、選手中心主義となり、技術未熟の者が次第に参加しなくなったり、あるいはこうした者の入部をこばむことがある。これはあくまで避けなくてはならない問題である。もちろん、各人の素質をのばすという教育的意味から、技術上素質のある者をのばしてやることは必要であり、選手制度は必然的なものである。しかし、施設の選手による独占、選手中心主義などは調整されなくてはならないことがらである。これは、高校・大学を含めていえることであるが、とくに中学校の場合は留意すべきである。

第三は、スポーツ集団の要求と、学校集団の要求との一致である。

スポーツ集団はその活動に重点をおき、学校当局は教育全般という見地から、他の学習活動を軽視することを恐れている。ともすると、この両者の要求が極端に違い、スポーツ集団はその活動を阻害されることもある。大学受験のための学習活動を盛んにするという見地から、クラブ活動が禁止されないまでも、制限されることのあることが伝えられているが、悲しむべき偏向教育といわざるを得ない。反面、スポーツ集団がその要求を過重評価し、他の活動、とくに学習活動を軽視する傾向があるが、厳につつしむべきことがらである。とくにプロ・スポーツの隆盛が学生スポーツを盛んにする反面、大きな悪影響をも与えているが、これは社会情勢のしからしめるところであるといえればそれっきりである。学生スポーツの本来の姿を失わぬよう体育指導者たるもの、考えなくてはならない問題である。

アメリカの体育は、資本主義文明が高度に発達するにつれ、スポーツが企業化し、国民体育が職業的体育におきかえられ、体育の頹廃への道程を辿りつつある。このことは、そのまま現在のわが国のスポーツに当てはまる現象でもある。もちろん、現在のプロ・スポーツの発展ぶりを否定するのではなく、余暇活動という面と関連させつつ、その価値を認めるにやぶさかではない。しかし、学生スポーツ集団がプロ・スポーツの影響を受け

て、プロ集団の予備軍のような観を呈している状況をうれえるものである。教育者たるものこの点を考慮し、学生スポーツを直接にプロ・スポーツに結びつけ、自己の名声を高めようとする（たとえそれが無意識的であるにせよ）を避けるよう配慮すべきである。

さらに体育集団特有の問題がある。人が集まって社会生活を営む場合、集団成員は相互に、他の成員よりすぐれようとする要求をもつことは、日常生活においてわれわれが経験するところのことである。これは競争competition という現象となって現われてくる。能力の異なった児童、生徒を収容している学校（または各種の職業集団）で学習（または仕事）を促進させるために、競争による刺激こそ最も効果をあげようという考え方がある。たしかに、競争は成績を上昇せしめる上に有効な手段である。J・B・マーラーは、学級の中で誰が一番早く加算ができるかという競争をある級に行なわせ、他の級には、学校中でどの級が一番早く加算できるかという点で競争させた。その結果、前者の級の平均点46.9に対し、後者は38.5点であった⁽⁴⁰⁾。前者は競争の結果であり、後者は協同の結果である。この限りにおいては、競争方法が協同方法より効果のあることを示している。

たしかに競争は、成績を上昇させる有効な方法である。しかし、教育という見地から、しかも社会的、人格的見地から考えるならば、競争ということにだけ依存してはならないのではあるまいか。

ことに体育の場合、走ればすぐ1着か2着かが決定され、投げればただちにその距離によって優劣が示される。チーム・プレイにおいては勝敗が判定されなくてはならない。したがって競争という現象が、そして競争の原理だけがあるようである。

一方、人間生活には協同という現象が普遍的にみられる。互いに敵対し、他人を犠牲にするような自己主張をするよりも、相互に友好的で協力的な行動をとることのほうが多い。体育においてもチーム・ワークは不可欠のものとされている。競争が有効か、協同が有効かは、ここで問題にするつもりはない。しかし、協同を体育を通じて習得させることも一つの体育の

使命であることだけはいっておきたい。

問題は競争という現象から引き起こされる反教育的現象を指摘するところである。

体育活動、とくに競技種目においては、優劣が端的に示される。なканずく、スポーツ・クラブにおいては対外試合の勝敗が結果となって現われてくる。国際オリンピック競技が、勝敗よりも参加することに目的があるということは誰でも知っている。しかし、われわれは目の丸が、メーン・ボールにあがらなくては失望し、選手の不甲斐なさを責めるのが人情であろう。参加すれば勝って欲しい。これが人情であろう。

しかし、われわれはここで反省しなくてはならない。勝つことに価値がないというのではない。勝つことを原理として学生スポーツは存在すべきではないし、このような原理によって指導すべきではないといっているのである。

そんなことはわかっている。しかし、それは理想論であり、敗れた場合には指導者の資格が問われる。勝利のみがわれわれの指導の結果を示すものである。……このように体育指導者は考えることもありうるし、また公言してはばからない者もいる。

このような人々は体育指導者としてののみではなく、人間としても失格者である。何故なら、学生スポーツ（広くアマ・スポーツ）とは本来そのようなものではないからである。教育という場において存在を許されているのが学生スポーツである。

学生スポーツ指導者および学生スポーツマンたるもの、いやしくも勝敗のみにこだわり、勝つために他の人間形成上にとって必要なことがらを軽視するようなことがあってはならない。

スポーツの練習は鍛練であり、苦しみがともない、禁欲（節制）がともなう。この練習というプロセスにおいて人間が育成されているのである。勝つことだけを目標にするほうがむしろ安易であろう。しかし、これは許されるべきではない。

スポーツという身体鍛練を通して、心身の健康、美と力の調和、社会性、しいては社会的人間を形成するのが究極の目的である。

われわれは、このことを理想として身につけ、常に実践の場にのぞまなくてはならない。

参 考 文 献

- 注(1) 竹之下休蔵，磯村英一編「スポーツ社会学」スポーツ科学講座，大修館書房
- (2) 日本体育会編「体育学研究法」 252頁
- (22) 花田，竹村，藤善著「スポーツマン的性格」不味堂 146～155頁
- (23) E. D. Jones : Administration of Industrial Enterprises. 2nd edit, 1925. P216 foot note。
- (24) Walter Scott : Greater Production, Its Problems and Possibilities Including a Full Treatment of Incentives, 1950, 463頁
- (25) 三枝幹夫「モラルとヒューマン・リレーションズ」ダイヤモンド社編『ヒューマン・リレーションズ』 120頁
- (26) 青沼吉松著「産業社会学の展開」日本放送出版会 141頁
- (27) 社会学辞典 295頁
- (28) 浅井浅一，大西誠一郎 著「体育と人間関係—集団内における人間分析—」蘭書房 100頁
- (29) M. S. Olmsted, The Small Group pp 42～43
- (30) ブルーム・セルジニック，前掲書 230～235頁
- 31 浅井浅一，大西誠一郎，前掲書 100～102頁
- (32) 同 書 104～105頁
- (33) 前川峯雄，久松栄一郎，江橋慎四郎編「現代コーチング」体育の科学 259～260頁
- (34) 馬場明男「社会学概論」 194頁
- (35) カートライト＝ザンダー 著，三隅二不二訳編「グループ・ダイナミックス」誠信書房 49頁
- (36) 梅村清弘「スポーツにおける監督者のあり方」
- (37) 日本体育学会編「体育学研究法」体育の科学社 311～312頁
- (38) 浅井，大西，前掲書 35頁
- (39) 同 書 36頁
- (40) 同 書 188頁